小学校における、情報教育を前提としたパソコンスキル向上のための指導

裾野市立東小学校　　　裾野市情報教育アドバイザー　　広田さち子

1.　研究の目的

情報教育は、パソコンを使うことではないとは言え、パソコンなしで情報教育を考えることは困難である。ただ、パソコンは一つの道具であり、目的に応じて選ぶことのできる手段の一つとして捉えるべきである。そして、選ぶためには、相応に使えることが前提になると考えた。

このため、平成１４年６月文部科学省の資料「情報教育の実践と学校の情報化」で提示されている情報教育の目標としての「情報活用能力」の３つの基本

・「情報活用の実践力」

・「情報の科学的理解」

・「情報社会に参画する態度」

の中で、特に小学校において焦点を当てることが示されている『情報活用の実践力』の育成を目指し、適切にパソコンを活用することができるために、学年相応に使えるスキルを身につけることを目的とした。

ただし、あくまでも「慣れ、親しむ」ことに重点を置き、「楽しく、無理なく、さりげなく」スキル向上できることを目指した。

2.　研究の方法及び内容

（１）基本となるパソコンスキルの３つの柱

①　キーボード入力（いわゆるローマ字）

②　マウス操作

③　パソコン画面からの情報を読み取る力

これらを基に、学年ごとのカリキュラムを考案し、実践した。

（２）キーボード入力のスキルの指導

１年生から「ローマ字入力」を指導。その後、３年生初め頃までにホームポジションを指導し、適宜文字入力の機会を作って練習した。

（３）マウス操作・パソコン画面の読み取りの力の指導

主として Word の図形描画ツール（オートシェイプ）を教材として、楽しく作品作りをすることを通して、これらの力の育成を目指した。

（４）指導上注意したこと

①　画面からの情報に注意することを示し、できる限り操作は子ども自身で行うよう留意した。こうすることで、次第に教師の支援なしに自分で判断できる力を培うことができる。また、子ども同士の教えあいにも繋がり、全体としてのスキル向上を期待できる。

②　指導するスキルは、特定のアプリケーションに固有の機能ではなく、パソコン一般に通用するスキルであることを、折に触れ説明した。

③　指導の際は、「一般的に通用する言葉」を用いることを心がけた。ファイル・フ

ォルダ・ドライブ、開く・閉じる、といった言葉に親しむことで、言葉を覚え直すことによる混乱をなくし、指導する側にとっても、意図したことを伝えやすくなる。

3. 研究の成果や今後の課題等

（1）成果

① 個人差を考慮してなお、学年相応のパソコンスキルを身につけ、新しいことに対しても速やかに吸収できる力を持つことができている。

② それまでに身につけたスキルを､新しい課題に向かって活用する力がついている。

③ 画面からの情報を読み取り、マウスとキーボードを使ってパソコンに指示するという、パソコンとの「会話」に慣れてきて、教師の支援が減っている。

（2）今後の課題など

① 『情報活用の実践力』: 作品を作ることが目的ではなく、それを通して、さらに「調べてまとめて伝えあう」といったコミュニケーション力などの、情報教育の基本を培うことができるような方向に持って行きたい。

② 『情報の科学的理解』: パソコンを使うことの必然性に気づかせ、その特性がわかるような指導に留意したい。

③ 『情報社会に参画する態度』: パソコンを初めとする情報機器を使うことによるメリットだけでなく、デメリットにも気を配り、それらを意識して活用できるような指導に関してのアドバイスなどを積極的に行っていきたい。

④ パソコンに親しむ機会をできるだけ多く設け、いつでも触れることのできる環境を整えることに努力したい。

（3）そのほか

これまでは、パソコンスキル指導が一つの独立した教科のような扱いで行われてきたが、あらゆる教科の中でパソコンを初めとする情報機器が適切に活用されることが本来の姿である。

本研究の成果により、子どもたちはパソコン活用の力を十分蓄えることができた。今後は各教科において、パソコンを道具として選ぶことのできる機会をできるだけ多く設けることを目指したい。

以上